

7. 憐れみの女神サツピア (ボホル)

昔々、恐ろしい旱魃と飢饉がボホルの地にやってきました。何ヶ月も雨の降らない日が続きました。革と湖は渴いて、焼けつきました。そして地を潤す水がないので、畑の広大な果物と野菜の収穫地域は衰えて、収穫することができなくなりました。

飲む水も、食べる穀物もなく、家畜はすぐに弱くなり、衰弱して、死にました。しかし、それらの肉は、人々が食べるのには適していませんでした。餓死寸前の人びとは、サツピアという憐れみの女神に向かって、空を見上げ、唱え、叫ぶのでした。彼らの叫びを聞き、この荒廃を止めて、彼らを助けるように。

美しく憐れみ深いサツピアは、空の雲に囲まれたすばらしい宮殿に住んでいました。そこでは、ほとんどの時間、彼女は魅惑的な彼女の庭で過ごしていました。彼女の美しい庭は、天国にだけ存在するような種類の庭で、最も素晴らしく、めずらしい植物と花で満ちていました。サツピアは、多くの時間をこの素晴らしい場所で過ごし、バイオリンを弾き、羽ばたいたり、さえずったりする白い鳩たちに囲まれていました。

彼女は、彼女の輝く、流れるような絹の白い衣服に包まれて、神々しい姿でした。そしてそれは彼女の長く黒光りのする髪が地面にほとんど触れるように伸びているのと対称的でした。

サツピアが彼女の空腹な民の絶望的な嘆願を心に留めるには、そんなに時間はかかりませんでした。彼女はすぐにバイオリンを置いて、彼女の愛する庭から走って行きました。彼女は特別な石橋のところへ走りました。そこは空に架けられていて、彼女が下界の彼女の民や地を見下ろすことが許可されていました。

彼女が橋に近づくと、人々からやってくる絶望的な叫びは、大きく、はっきりしたものになりました。彼女は息をきらせて、架けられた石橋の所へ来て、端に身を乗り出して、下を見ました。サツピアは彼女の民が苦しんでいる痛みを見た時、衝撃を受けました。土地は不毛で、塵になっていました。彼女が見渡す限り、死んだ動物の死体が散らばった光景が広がっていました。そして、彼女の愛した人々、男や女や子どもたちは、崩れるように倒れて、渴きと飢えのために死にかかっていました。

サツピアは、苦しみの心を抱いて、彼女のことを

全く信じている人々を救うためには、緊急の行動が必要であることを知ったのです。彼女の目は涙に満ち、彼女の柔らかな頬を流れ、下の地に落ちました。彼女の落とした涙は、しぼんだ植物の上に落ち、栄養を与え始めました。しかし、女神の涙だけではすべての穀物を救うには十分ではありませんでした。

サツピアの涙が乾くと、他に何をしたらいいのかわかりませんでした。自暴自棄になって、彼女は白い衣服を開き、彼女の胸をあらわにしました。彼女は胸を絞り、彼女の乳を流し始め、白い雨のように下の地に落として行きました。

下の人々は、この変わった白い雨は何だろうか、と不思議に思いましたが、しぼんだ穀物が生き返り始めると、彼らは幸せになりました。

必死になったサツピアは、彼女の胸からもう乳が出なくなるまで絞りに絞りました。しかし、生き返る必要のある穀物はまだたくさんありました。彼女は胸から血が流れ始めるまで強く絞りました。血の滴りが下の地に落ちて、残りのしぼんだ植物を生き返らせ始めました。人びとは彼らの心と手を持ち上げ、彼らの感謝の気持ちを恵みの女神に叫びました。

サツピアは今や疲れ果てていました。彼女は喜ぶ人々を見下ろしてつぶやきました。「さあ、私は私の血管の血を与えました。私にはもうできません。穀物が花を開き、あなた方の苦しみを和らげる実りをもたらしてくれますように。」サツピアは弱く微笑み、ゆっくり愛する庭への道を、はばたく白い鳩に導かれて、帰ってゆきました。

穀物は繁茂し、大量の実りをもたらしました。しかし、彼らが穀物を収穫する時、人びとは驚きました。女神の白い乳を受けた穀物は、白い実をつけました。そして赤い女神の血を受けた穀物は、赤い実をつけました。しかし、どちらも極めておいしかったのです。

人びとはこれらの変わった赤と白の穀物を続けて植えて、収穫しました。それらはたやすく育ち、繁殖して、いつも豊かな穀物を生み出しました。彼らはもう二度と空腹になる必要はありませんでした。今日まで、これらの変わった穀物は、その地方で続けて育っています。

これがおいしい赤米と白米の始まりで、憐れみの女神サツピアが、彼女の愛するボホルの人びとへ与えた、特別の贈り物です。